水の源

MIZU NO MINAMOTO

Spring 2018
40

ウォークルポ
関係人口の拡大をXキャンプで
～若者の志と覚悟を育てる～
京都府与謝野町

ウォークルポ
「たくあん漬け＆郷土料理会」を通して強める地域の絆
東京都檜原村

首長リレー連載
岡山県真庭市
太田昇市長

水源の里のうまいもん
まるごとイカロケット
徳島県牟岐町

長野県上松町（あげまつまち）「駒ヶ岳神社例祭 太々神楽（だいだいかぐら）」
2018年5月3日（祝）開催予定
太々神楽の奉納は、古くから神楽職として定められた氏子の長男のみに伝えられるもの。国選択無形民俗文化財、長野県指定無形文化財に指定されています。全十三座の神楽があり、天狗が舞う「四神五返拝（ししんごへはい）」は昼頃上演の予定です。

巻頭インタビュー　水源の里へ思いを馳せる
アートで町おこし
株式会社応用芸術研究所　代表取締役　**片木孝治**さん

巻頭インタビュー
水源の里へ思いを馳せる

聞き手:『水の源』編集長　町井且昌

アートで町おこし

株式会社応用芸術研究所　代表取締役
片木 孝治 さん

Profile 片木（かたぎ） 孝治（こうじ）さん
1970年生まれ。株式会社応用芸術研究所 代表取締役、一般社団法人 北陸古民家再生機構 理事など。建築や環境活動をはじめ、創造表現（芸術）をプログラムした地域づくりを手掛ける。河和田アートキャンプ、京都Xキャンプ総合ディレクター。河和田アートキャンプは地域づくり総務大臣表彰（2009）、グッドデザイン賞（2014）を受賞している。

――きっかけは災害支援だったのですか。

河和田地区は鯖江市の東部、人口4,200人の中山間部の集落です。鯖江市はメガネフレーム、越前漆器、化学繊維などの工業が集積しています。中でも1,500年の歴史を持つ漆器は有名ですが、ライフスタイルの変化や安価な商品が出回り苦境に立たされています。しかも2004年7月の「福井豪雨」では壊滅的な打撃を受けました。これをきっかけに災害復旧支援活動が始まり、私たちも、京都市で環境問題やアートを学ぶ大学生を中心としたグループ数名で、災害支援のボランティア活動として、河和田地区に支援に行きました。

ボランティアの窓口になっていただいたのが地元のNPO法人かわた夢グリーン。一緒に災害復旧支援活動をしました。何回か活動を重ねていくうちに私たちと地域の連携が深まっていきました。

河和田アートキャンプでの活動の基本として「芸術が社会に貢献できることは何か」を問い続けることでした。

活動は、地域生活を６つの分野（農業･林業･伝統産業･学育･食育･体育）に分けてアートで考えます。例えば「農業とアート」では、耕作放棄地を学生農園として活用する中で「草版築（くさはんちく）」の作品にとりくみました。１辺が２m×２m×２mの立体枠組みに、地域の社会奉仕で得た「草刈りの草」を詰め込み、巨大な草の彫刻が出来上がりました。夏の日差しで発酵する草の色合いの変化や匂い、熱。視覚や嗅覚、触覚に訴えかける五感を刺激する作品です。しかし、大切なのは、作品の制作過程に「草刈り」という地域貢献があり、作品が「堆肥」として循環するところなのです。

――漆器職人さんたちとのかかわりは？

ボランティアがきっかけでお話をしているうちに伝統産業に携わる漆器職人さんたちと出会いました。お話を聞いていると再び設備投資をして漆器業をやるかどうかの決断を迫られている時だったのです。設備や道具類は流され、息子さんに継がせるかどうか、大きな悩みを抱えておられました。

河和田との関わりは来年で14年になります。京都を中心に全国66大学の学生が参加しています。今は災害復旧という仕事よりも地域振興という立場で学生と地域の人たちが交流していく形になってきています。

――河和田に移住した方がおられるとか。

22名が河和田に移住しています。この取り組みのスタートは環境問題。最初は災害ゴミの分別問題から入ったのですが、取り組むうちに田畑を何とかしなきゃとか、そもそも循環型の昔の暮らし方をどのように取り戻すのか、など我々自身に問いかけました。学生たちも大学の授業として参加するのではなく、単位もない自主的な参加なので、本人が自身で目的を見つけて、本気になって地域と向き合う、そのうちに地域への愛着が深まり、地域に惚れ込んで移住することに繋がりました。なので、移住したOB・OGは、自主的に地域の寄り合いや会合に参加し、地域に新しい風を吹き込む役割を担っています。こうした関係になるためには、年間を通した活動と、長期の滞在生活が欠かせません。私の経験で言うと、20日以上は必要ですね。10日位だと、学生は疲れて終わる一過性パターンです。また、地域では空き家の古民家をお借りして、学生同士で共同生活をします。雑魚寝、炊事洗濯と学生は自力で生活します。大抵、学生が来ると地域の方々は受入れに力が入り過ぎて疲れますが、ここではそれはありません。差し入れも頂きますが、学生たちは、お米がなくなったら、農家さんのお手伝いをして、お米を頂いてくることも…（笑）それも長続きの秘訣です。

――アートで町おこしとは？

2004年7月に災害があって2005年の夏からアートキャンプはスタートしました。アートキャンプというのは現地で生活しながらアートを通じて地域おこしをしようという取り組みです。2010年に京都府の方から、この取り組みを京都でもできないかというお話をいただき2011年から京都府の与謝野町や美山町でも始めました。

夏休みに約40日間、その他を含めて現地に年間70日くらい滞在します。受け皿となる地域の区長会や自治会にプロジェクトの「実行委員会」を立ち上げていただき、学生たちはそれに参加します。例えば農業系の学生ならば、農業に関連するプロジェクトに、林業系であれば、山に関わる猟師や林業家の方のプロジェクトに。地場産業に関わりたいという学生ならばその方面へという形でいろんな学部の学生が自由に参加しています。私は建築が専門ですが、「建築」というと街並み調査や古民家の空き家対策などが分かりやすいのですが、関わる学生たちの専門の違いやキャラクターによって、プロジェクトの内容が変わっていったりします。「一つのことにみんなで頑張りましょう」という形では無く、みんながそれぞれ違うことをやっているので、「遠心力」で地域を元気にすることが重要だと考えています。地域の課題はひとつではなくて、すべてが絡んでいるんですね。そういうことを全体として取り組むことが出来ないかと思ったときに、やはり一つの専門だけでは乗り越えられないのです。

まずは、学生が地域のいろんなものを学ぶことを通して、「地域を守っていく」という取り組みから始めています。「守る」がキーワードですね。「食育」という言葉もありますが、「食守（しょくもり）」という言葉に置き換えて食を育むだけでなく、「食を守る」というイメージで「どのようにして農家が作っておられるものを守っていくのか」。そのような地域課題の本質に向き合うプロジェクトを学生たちと考えることを大切にしています。

関係人口の拡大をXキャンプで
～若者の志と覚悟を育てる～

京都府 **与謝野町**

【取材・文：永井 晃】

2004年の福井豪雨の支援を目的に始まった『河和田アートキャンプ』。アート以外の分野でも大学生の持つ知識や技術を活かし、地域の様々な課題解決を目指す取組みが「Xキャンプ」。2012年に京都府与謝野町で産声を上げ、今年で6年目を迎えた。「河和田アートキャンプ」から事業に携わってこられた片木孝治さん（株式会社応用芸術研究所　代表取締役）、第6期の学生代表を務めた岡本和哉さん（京都工芸繊維大）、第7期の学生代表を務める大浦千亜紀さん（同志社大）、第7期副代表の浅井ゆうみさん（福知山公立大）と地元住民の伊藤公博さんに「Xキャンプ」の目指す方向や魅力について伺った。

Xキャンプでは何にでも挑戦！この日は電動のこぎりを体験

カフェでは毎夜熱い議論が…

子どもに本を読み聞かせるブックキャンプ

「一村一品運動」が先駆け

私が役所で企画職が長かった影響もあり、地域活性化の事例を視察したり、書物で勉強したりし始めたのは40年も前のこと。そのころの成功事例として有名なのが、大分県の平松知事(当時)による「一村一品運動」。地方自治体が主体となって、地域ブランドを発掘･育成し、市場競争力をつけて大都市の消費者に届ける。この頃の活性化策の多くは､地域経済の振興を狙ったものだった。バブル期に入ると自治体主導型から巨大資本誘導型の活性化事例が増え始める。リゾート法の追い風も受けながら全国の地方都市で大型リゾート開発が展開された。生き残った事例もあるものの、ほとんどの施設は淘汰されている。巨大資本誘導型の最大の欠点は「地域との距離感」。非日常を狙うあまりに、それぞれの地域の持つ個性や文化を根こそぎ否定し、映画のセットの様なものを目指し建設したことにある。そのような場所を訪れると、今でも少なからず違和感を覚えるのは筆者ばかりではないと思う。

キーワードは「持続可能」

時が流れ、日本社会の大きな課題は、東京一極集中からの脱却と地方創生に移行してきた。そもそも地域を活性化させて各自治体や集落が描く未来予想図は40年前とは全くの別物となっている。その場所に住み続ける人々がいることを前提として、その人々の経済水準を上げることで住民満足度を上

昆虫や水生生物を調査する子どもキャンプ

げようとしたのが「平松型」。没個性となっても民間資本を誘導し雇用や賑わいで活性化を画策した「バブル型」。では「現代型の活性化策の終着駅は？」と問われると言葉に詰まる。なぜなら熟成社会となり地域活性化の目的はまさに十人十色となったから。経済振興を目的とするもの、移住定住による人口拡大を狙うもの、福祉やインフラを整備し住民満足度を満たそうとするものなど、目的も方向性も千差万別。共通するのは、右肩上がりの拡大路線に決別し、人口や市場の縮小を基調としつつ、持続可能な社会づくりを目指しているという点。日本社会は高度経済成長やバブルといった様々な経験を経て成熟期を迎えている。成熟社会が求める活性化策とは？住民満足度をいかに刺激するか？そして『よそ者、馬鹿者、若者』をいかに参画させるか？成功の鍵はこのあたりにあると思われる。

森林の活用を研究し続ける『山守』の活動

Xキャンプは活性化のモデル

高度経済成長期に『金の卵』として都市へ向かった団塊世代（第1世代）が、既に社会の第一線から退き、その子どもたち（第2世代）が中心となって社会を支えている。第2世代の子どもたち（第3世代）には、もはや故郷と呼べる場所がなくなりはじめている。都市で生まれ、都市で生活し、都市で成長してきた第3世代に将来を託す時代もそう遠くない。そんな時代だからこそ、「Xキャンプ」の取り組みには、現代版の地域活性化のモデルになりうる大きな可能性を感じた。

Xキャンプで活性化

2012年に与謝野町をはじめ他3か所（美山町、鯖江市、坂井市）をフィールドとして活動が始まったXキャンプ。足かけ14年で全国65大学から延べ2,000人の学生が参加した実績を誇る。主宰する片木さんは、もともと大学で建築を教える立場におられた。2004年の福井豪雨で地域に入り災害支援活動に取組んだことがきっかけとなり、翌年地域からの要請で「河和田アートキャンプ」を実施することとなった。福井県での経験をもとにキーワードを『アート』限定から『X』（地域課題全般）に拡大。切り口が芸術であったアートキャンプだったが、実際に地域に入り込んで活動を始めると芸術限定の考えは通用しないと実感した経験からのもの。Xキャンプでの取り組みは『旅守』

都市と農村交流の可能性をテーマに活動する『旅守』

関係人口の拡大に期待を寄せる山添町長との記念写真

『食守』『育守』など地域での活動は6種類にも及ぶ。片木さんは「毎年のXキャンプで何ができたか？という点的な評価ではなくて、キャンプに参加した学生が20年後に与謝野町とどのような関係を持続しているかが本当の成果となる」と語ってくれました。

若者が魅力を感じる地域

参加した学生たちは地域の住民と懇談を重ね自分の所属を選択していくことができる。年間のスケジュールは4月の新入生の勧誘に始まり、1泊2日のフィールド体験ツアーへの参加。これらを通じて学生たちは自分の所属を決定していく。その後毎週ミーティングを重ね自分たちが地域に提案できることを話し合いながら、活動プランをまとめていく。5月から7月までの間、そのプランを地元住民に提案して、実施可能な事業へと煮詰める作業を繰り返す。いよいよ夏休みが始まる7月。学生は与謝野町のキャンプに集結し、自らが企画した事業を展開していく。事業後は効果測定（KPI）のため月1回のペースで与謝野町を訪問。事業検証はもとより、来年度に向けた人脈づくりと次年度プランの種探しを行う。2年生中心の活動であり、毎年学生たちの顔ぶれは変化していくものの、この連鎖が6年間続いている。片木さんは「これからの時代に生き残る地域は、若者が仕事を創ってみようと思える環境が整っているか？やりたいと思える仕事の条件が揃っているか？がキーワードとなるだろう」と予測する。その意味では、若い時代に『仕事』と『地域』に向き合う経験を積むXキャンプの意義は大きいものがある。

与謝野町はこんなまち

京都府北部の丹後半島の基部に位置する面積108㎢、人口約21千人のまち。大江山連峰をはじめとする山並みに抱かれ、野田川流域には肥沃な平野が広がり、天橋立を望む阿蘇海へとまち並みが続いている。京都・西陣からちりめんの製織技術の導入に成功して以降、「丹後ちりめん」主要産地として農業とともに基幹産業となり、その歴史を残す「ちりめん街道」が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。また、「300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」として、日本遺産にも認定されている。

Xキャンプを取り巻く人々

人々の熱意に感動

岡本和哉さん
（奈良県大和郡山市出身　京都工芸繊維大学2回生　20歳）

参加の動機は、先輩に声を掛けられたこと。行政と地域と学生の3者で作るプロジェクトに魅力を感じたことと、地域のおじさんたちの熱意に感動しました。Xキャンプでは『山守』に所属。そこで、人と関わる重要性や関わりの中で何かを作っていくプロセスを学びました。日々接する人々が輝いていると自分自身も触発されて輝くことができます。家電製品の製品企画に進む計画だった目線が、農機具の製品企画に変化してきました。

人生実験をやりつくす

浅井ゆうみさん
（愛知県岡崎市出身　福知山公立大学1回生　19歳）

ちりめん街道アンケートで知り合った女性にあこがれて、気が付いたらキャンプに参加していました。キャンプでは「食守」に所属。動機は、食べること、調理することが好きだったから･･･。このキャンプにはスゴイ人が一杯います。そんな人たちと一緒に生活し会話し、どんどん自分のスキルが高まっていくことに感動しています。人と接することでどんどん教育されたい。大人になったときにするべきことの実験を全てやりつくしたいです。

公務員志望に迷いが

大浦千亜紀さん
（北海道函館市出身　同志社大学1回生　19歳）

地域創生を考えることが大学の志望動機。高校時代に部活で北海道活性化プロジェクトを研究していた私にとってXキャンプは絶好の舞台でした。キャンプでは『人守』に所属。

自分自身が地域コミュニティのキーパーソンとしての広がりを創ることができれば･･･。将来は公務員志望で政策を企画･立案するのが魅力と考えていました。しかし､Xキャンプで政策立案は公務員だけの特権でないと感じつつあり迷いが生まれています。みんなを支えるリーダーを目指したいです。

Xキャンプは夏の風物詩

伊藤公博さん
（与謝野町滝区在住　滝･金屋農業振興会会長･専業農家　50歳）

滝・金屋地域約100世帯で構成する農業振興会の会長を務めています。7年前に府から「Xキャンプ」の話があったときからの付き合いです。当地域には若者がいないため交流する機会がありませんでした。Xキャンプは夏の風物詩となり地域に定着しています。志の高い学生と交流することで、地域も多くの元気や勇気をもらってきました。課題は、地域側の参加者のすそ野を広げること。他の地域から「滝・金屋は賑やかで羨ましい」と言われると自分たちの地域を誇れる気持ちになります。

取材後記

『近ごろの若者は…』お年寄りが若者に批判の意をもって投げ掛ける言葉だが…。あえて私は「近ごろの若者は、偉い」と言いたい。2月に韓国で開催され過去最多のメダルを獲得したピョンチャンオリンピック。メダルを獲得した日本人選手の多くは20代の若者ばかり。そして彼らが発するコメントは異口同音に「今まで育ててもらった全ての人のおかげで…」と感謝を述べています。自分の人生を振り返ってそのような言葉を本心から口にできるようになったのはいつの頃か？人の親となり、自身の親を見送ったりして、一様の経験を積んだ40歳くらいからだったことを考えると「偉い」としか言いようがありません。今回取材を受けてくれた3人の若者も将来や学ぶことの意味をよく理解し、貪欲に知識を吸収しようとしている姿が記憶に刻まれました。改めて「近ごろの若者が、社会を動かす時代を見てみたい」と感じた取材でした。

水源の里の うまいもん お取り寄せ

【文：並河杏奈】

徳島県産のイカの旨味とチーズがギュッと詰まった

まるごとイカロケット（1つ）　900円（税込）

徳島県牟岐町（むぎ）

面積57㎢、人口4,231人。徳島の南東部に位置し、太平洋に面した温暖な気候で、町の87％を森林が占めている。黒潮が流れる出羽島、津島、大島周辺では、イシダイ、メジナ、アイゴなどが釣れ、年間を通して磯釣りのファンが全国から訪れる。また、大島の湾内に巨大なツリー状のコブハマサンゴが見つかり、「千年サンゴ」として地元の協議会が保全活動を行なっている。

株式会社 泉源（いずげん）
所 徳島県海部郡牟岐町大字牟岐浦字浜崎177
Tel 0884-72-1136
http://izugensakana.com/

スルメイカの旨みをチーズと一緒に余すところなく詰め込んだ「まるごとイカロケット」。スルメイカ一杯をまるごと使ったこの一品は、イカとチーズの相性が抜群で、おつまみとして最適です。

そのままスライスして食べるも良し、ゲソを刻んでチャーハンに入れるも良し、アレンジしてみるのもオススメですよ。

「まるごとイカロケット」をつくるのは、明治時代末期に牟岐（むぎ）町で創業した「株式会社泉源（いずげん）」。伝統的な製法で無添加の干物をつくる会社です。創業当時は屋号を「泉屋」とし、魚がたっぷり入った天秤棒をかついで行商をしていました。150年に渡る長い歴史のなかで、牟岐町の大切な資源である「海」や「魚」と向き合いながら、大切に守り続けてきた会社です。太平洋戦争中に、一度は倒産をしてしまった「泉源」が、こうして再興を果たすことができたのは、5代目社長の和田薫氏（現社長の祖父）のおかげなのだそう。

先代が生涯をかけて受け継いできた家業や町の食文化を、これからも未来へと継承していくことを目的に、2016年4月に地元のデザイナーと共に水産加工品の自社ブランド「いず坊」を立ち上げました。

漁港での水揚げ量が年々減少していくなかで「まるごとイカロケット」には、地域の食文化だけでなく「泉源」の深い歴史と熱い想いがギュッとつまっています。

読者プレゼント

まるごとイカロケット（1つ）　1名様

●アンケート
Q1. 面白かった・関心を持った記事
Q2. 今後取り上げてほしい内容
Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●プレゼント応募方法
はがきもしくはメール本文にアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、下記宛先『水の源40号』読者プレゼント係までご応募ください。
【平成30年5月21日（月）消印有効】

※ 当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
※ ご応募いただいた皆様の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は
全国水源の里連絡協議会　水の源編集委員会
綾部市役所 定住交流部 定住･地域政策課　〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL：0773-42-4271　FAX：0773-54-0096　E-mail：teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigennosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ
『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円（送料込）
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール､HPから

「たくあん漬け&郷土料理会」を通して強める地域の絆

東京都 檜原村

Walk ウォーク Repo ルポ

【取材・文：蒲田正樹／撮影：大槁弘】

豊かな自然と食材に触れる

東京で本州唯一の村、東京の奥座敷ともいわれるのが檜原村。

檜原村観光協会主催、地域おこし協力隊がサポートする「たくあん漬け＆郷土料理会」（1月27日）に参加してきた。

大根を抜いて土をとって洗ってそれを天日に干す。水分がほどよく抜けたところで調味液に漬け込んでおき、いい塩梅になったら取り出して、感謝とともにおいしく「いただく」……。

漬物づくりを通して、先人の知恵、自然の恵みや食の大切さ、そこにつながる命の大切さを学ぶ。と同時に、里山、田舎暮らしに興味を持っている人に檜原村の魅力をアピールしようというものだ。

たくあんは昔ながらのぬかで漬けるたくあん漬けと一般的な麹漬けによるたくあん漬け、2種類の食べ比べ

野菜を収獲したあと、皆で郷土料理をつくっていただきます。食事の前に食材への感謝を込めて手を合わす

みずみずしい収獲したばかりの蕪（かぶ）

もちろん、漬物づくりは1日で完結できるものではない。

まずは畑を耕し大根の種を蒔くのに1日、大根を収獲し干すのに1日、漬けるのに1日、それぞれの作業を、ある程度日をあけて実施して、いよいよ最後の出来上がりをおいしく「いただく」。この4回に分けて行われた催しである。

じつは取材班は最終回の「いただく」だけに参加したので、まさに文字通り「おいしいところ取り」をさせてもらった。

新鮮野菜に大感激！

参加者は全員で8名。母娘で参加、友人と参加、そしておひとりさま、と参加者はいろいろ。初回から連続でこのイベントに参加されている方ばかりかと思っていたが、通しで参加した人はひとりもなく、4回すべてに参加した皆勤賞は、運営スタッフだけ。今回が初参加という方のほうが多いようだった。

案内役の鈴木留次郎さん。メープルシロップを村の名物にしたいと企画中

地域交流センター（観光協会）から歩いて5分の畑で収獲体験

一つのテーマを掘り下げる連続イベントではあるけれど、たとえばなにか本格的に資格を取得するとか、系統立てて学問をするといったものではないので、初回に参加していなくても、あるいは途中の1回だけの参加でも、それぞれの回、一回一回が充実・完結していて、楽しく体験ができるようになっているわけだ。

今回の取材は、出来上がりをいただくという最終回。

漬物を取り出して切って食べるだけならあっという間に終わってしまう。極端にいえば、デパート催事の試食コーナーで、檜原村のおいしい漬物を試食するのと変わらないことになるが、この地までわざわざ足を延ばしてこそ得られる感激、感動があって……　そのひとつが野菜の収穫体験であった。

案内人はトメジイこと鈴木留次郎さん。

曾祖父の代から檜原生まれの檜原育ちで、長く役場に勤められた後、今は観光協会や地域おこし協力隊の相談役のようなお立場。今回のような収獲体験イベント用に観光協会が借り受けた畑の世話もされている。

数年ぶりの大雪が降ったあとの週末、まだ雪が残る山の斜面の畑に、白菜や小松菜、のらぼう菜、蕪などが、朝日に照らされてまぶしい。

「せっかく会費を払って来ていただいたんだから、遠慮なくどんどん持って帰ってくださいな」と、トメジイからすすめられ、帰りの荷物の重さも考えずに野菜を競うようにして収獲。

さらに「そのまま直接食べてもうまいよ」と言われ、採ったばかりの白菜の葉をそのままひとかじり。葉っぱに虫食いのあとがいっぱいあるのはご愛敬、虫も食べたくなるおいしさ、甘さ、みずみずしさ、そしてなにより安心できる味だ。

地元「おかめひょっとこの会」の協力で皆で郷土料理をつくり楽しむ

たくあんが主役？

野菜収穫の後は地域交流センターに戻って、今度は「郷土料理会」。

週に一度、65歳以上の方を交流センターに招いて一緒に食事をする会があり、そのお世話をしているのが「おかめひょっとこの会」だそうで、今回はこの方々が檜原村のお年寄りでなく、我々をサポートしてくださった。ホワイトボードに本日の献立が書き出され、それを参加者皆で手分けして調理していく。

「ポテトサラダ」が郷土料理？と疑問を持つ方もいるかもしれないが、材料はオイネイモという檜原村特産のジャガイモ。かつて山梨からオイネさんが嫁入りのときにもってきたツルイモが根付いたジャガイモ、つまりオイネさんとともに檜原村に嫁いできたジャガイモで、これが当地の気候にもあっていたのか特産となった。今は「ひのじゃがくん」というキャラクターも生まれ、クッキー、アイスクリーム、焼酎などが商品化されている。とにかくびっくりするぐらい甘くておいしい。ポテトサラダにきゅうりはおなじみだが、この時期のキュウリは値段が高いので、彩りには青菜を混ぜて出来上がり。マヨネーズを入れようとする人に、せっかくの素材の良さが壊れるから入れなくていいという声もあり。食卓にマヨネーズをおいて好みでかけるということに落ち着いた。

「とっちゃなげ」は汁物で、小麦粉をねったものを野菜、きのこなど具だくさんの汁に投げいれていくもの。取っては投げるから「とっちゃなげ」で……岩手のひっつみ汁、大分の団子汁など、ほぼ日本全国似たものは多いけれど、檜原村でもおうちによって投げ入れるものの大きさや形が違っているなど、家ごとの特徴があって、いってみれば、檜原村のだれもが郷愁を感じるおふくろの味というところだろう。郷土料理をいっしょにつくっていくことでそのレシピも継承されていくわけだ。

ほかにも「芋からの煮物胡麻和え」「刺身こんにゃく」など、いかにも体に良さそうなものばかりで、食卓を囲み楽しんで、もちろん、今回のメインである大根の漬物2種もいただいた。

たくあん漬け講師の野村和夫さん（左）と地域起こし協力隊の細貝和寛さん

イベントで内側の絆を

たくあん漬けを指導したのは野村和夫さん（81歳）。

「昔は野菜ばっかりで肉はほとんど食べなかったですね。米粒を針にくっつけて糸を垂らしたら、ゴリとか岩魚とかが簡単につれたもんですよ。タンパク質は魚から。母親が和裁をやっていたので、あるとき絹糸をこっそり持ち出して、それで釣りをしたら、糸が細くて光らないからか、びっくりするぐらい釣れたけれど、絹糸をくすねたことがバレて大目玉を食った」

こんな昔語りを聞きながら、ゆったりと温かい時間が流れていく。

「今回参加している方はどこでこのイベントを知ったの？」

地域起こし協力隊の一人、細貝和寛さんに聞いたところ、SNSや口コミでということであった。費用対効果を考えると宣伝などを打てないし、人が多く集まってもそれに対応できる受け皿もないので、今回のイベントは、不特定多数の人にアピールするのではなく、ほんとうに檜原村のことが好きな人やいずれ移り住んでみたいという人に焦点を当てたイベントとのこと。

実際、参加者の自己紹介でも「家族の理解はこれからだけれど、いずれこの村に住みたい」という声はいくつかあった。また、すでに檜原村でNPO活動をされていて、参加者のようなスタッフのような、微妙な立ち位置の方も交じっていた。

たくさんのファンをつくる。人の流れをつくる意味で観光促進も大事である。檜原村には「払沢（ほっさわ）の滝」をはじめとする滝めぐりやトレッキング、サイクリングなどのキラーコンテンツがある。東京都心から車で1時間半とかからない地の利があるので「行楽地」としての魅力を大いにアピールできる強みもある。しかしその一方で、過疎高齢化も着実にすすんでいる。そこに暮らす人の生活を守る、まちを元気にする、コミュニティを大事にするといったことも大切だ。

今回の「たくあん漬け＆郷土料理会」は後者になるだろう。

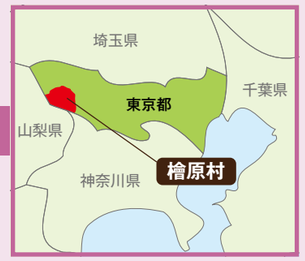
「地方創生」ブームで、それ自体はもちろん悪いことではないけれど、どこそこで流行った、受けたといった情報で右往左往される面も少なくない。安易な真似もあって、どこもかしこも同じ顔、のっぺらぼうになりがちだ。

「地域おこし協力隊」とは、若い人が入って、自分たちの論理で新しいことをはじめるのではなく、地域に溶け込んで、地域の方々とコミュニケーションを深めながら、その地ならではの価値・魅力を発見し、発信していくものだろう。

今回は、地域おこし協力隊のメンバーが、婦人会の女性の方々に「〇〇さん、△△をとってきて」などと気さくに声をかけられたりする姿が見受けられた。外に向けたイベントではあるが、イベントを通して上の世代と下の世代、あるいはもともと住んでいる人、移り住んだ人、檜原村に関係するいろいろな人たちが一緒になにかをつくり上げていくことで、絆を深めていく…。

「たくあん漬け＆郷土料理会」はそんな側面ももっていたようだ。

檜原村はこんなまち



東京都多摩地域西部にある、東京で本州唯一の村。人口2,237人（2018年2月1日現在）、面積105㎢で山林が93%を占める。村域のほとんどが関東山地の中にあり、多摩川支流である秋川に沿って約30の集落がある。冬の寒さは厳しく、日本の滝100選に選ばれる払沢（ほっさわ）の滝が凍結するほど。
奥多摩三山、浅間尾根を中心としたハイキング、釣りやバーベキューなど手軽な川遊びが観光の中心である。ヒルクライムレースなどサイクリングスポーツが盛り上がっている。

首長リレー連載
No.8

私たちの地方創生

岡山県真庭市
太田　昇 市長

「真庭ライフスタイル」の実現を目指して

里山資本主義真庭の挑戦

今、真庭市は「里山資本主義のまち」として中山間地域のモデルとなり、全国から注目を集めるまでになっています。

「里山資本主義」とよばれる市内での取組は、地域資源を再発見し、それを内外の目で見直し、その価値を高めながら次世代に引き継いでいこうとするもので、地域の生活や文化に根差した考え方から生まれたものです。市の総合計画ではそれを「真庭ライフスタイル」と呼び、地域資源を余すことなく使い切り、多彩な価値観を応援しあう暮らしぶりを、「まち」の魅力として発信するとともに、真庭の永続的な発展に向けて取組を進めています。

その取組の一端として、真庭市では、環境保全と経済発展の両立を目指して、特にバイオマス（木材や有機廃棄物など）を利用した様々な取組を行っています。また、これまでは「ゴミ・産業廃棄物」として処理されていた「生ごみ・し尿・浄化槽汚泥」を地域の資源として活用し、農業用バイオ液肥を製造するプラントの建設に向けて準備を進めているところです。

このように、バイオマスを始めとする様々な地域資源を活用した「新しい価値」と「地域の内と外を繋ぐ経済循環（回る経済）」の創出、さらに環境面からは「里山・河川環境の維持保全」、「域内での自然再生エネルギー自給率100％の達成」などを目指し、「まち」の持続可能な発展に努めています。

持続可能な発展に向けて

持続可能な発展に向けての取組の一つとして、真庭市は岡山県の中央部を南北に流れる「旭川」を軸に、下流自治体や企業・団体等との連携を図っています。

岡山市とは連携中枢都市圏形成に係る連携協定を結び、「河川環境保全の推進」「ESDによる人づくりとネットワーク化の推進」といった項目を連携して取り組んでいます。また、下流域の企業とは「真庭・トンボの森づくり」を通した源流域の森林保全活動を、環境保全団体とは「かいぼり調査」といった河川の生き物調査を行っています。さらには、瀬戸内海地方と連携し、かきの殻を河川に沈めて水質浄化を図る試みも予定しています。

このように、源流域の自治体として環境を保全していくために様々な取組を行ない、今後は、市民・産・学・官が、より密に連携・協力し、持続可能な発展を目指していきます。そしてその旗印になる目標が、国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」です。私たちは、世界の一員として、このかけがえのない地球で共存していく必要があります。このため、中山間地の小さな自治体であっても子供からお年寄りまで、常にSDGsの17の目標を意識して行動し、次世代により良い状態で引き継ぐことを意識しながら日常を送ることが必要です。

「真庭なりわい塾」

そのためには、人材育成が大きなポイントです。真庭市は、未来を担う「ひと」づくりのために、「真庭市未来を担う人応援基金」を創設し、教育及び学習、産業、福祉など幅広い分野で、真庭市の様々な人を幅広く応援し、「だれもが活躍できるまち」を目指して、市が政策的に実施する事業と併せ、市民提案型の事業を公募し、市民や団体等が実施する取組支援を行っています。

また、平成28年度より、市北部の中和地区をフィールドに、遥か昔から紡いできた暮らしを学びながら持続可能なライフスタイルを模索し、新しい「なりわい」のカタチを創造するため、特定NPO法人共存の森ネットワーク理事長の渋沢寿一氏を塾長に、人材育成塾「真庭なりわい塾」を開講しています。

この塾では、「あなたは、どこで、誰と、何をしたいと考えていますか？」といった漠然とした「想い」を、この塾に通いながら、少しずつカタチにしていきます。夢と志のある皆さんの参加をお待ちしています。

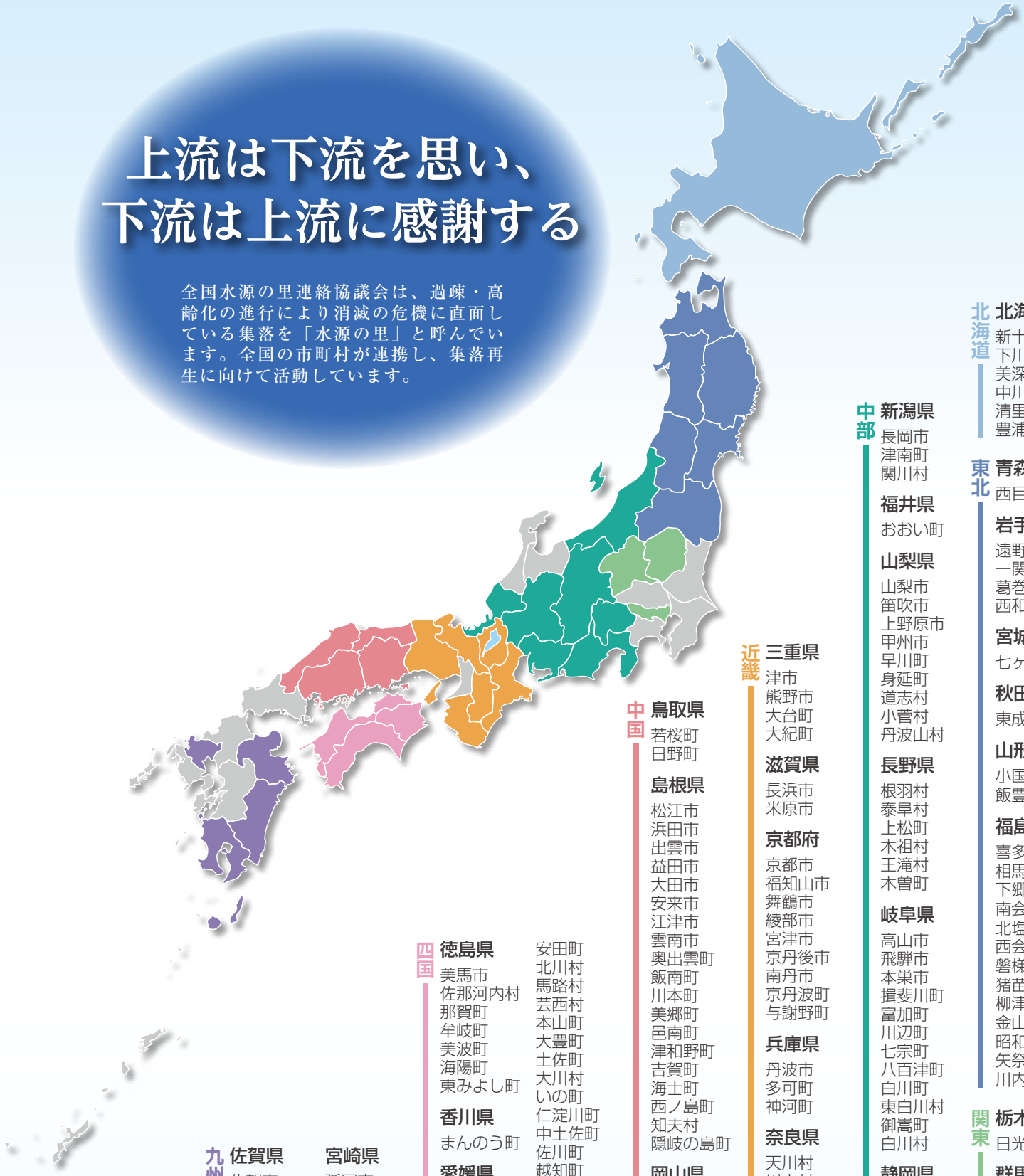
バイオマス発電所

真庭・トンボの森づくり

かいぼり調査

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



北海道

北海道
新十津川町
下川町
美深町
中川町
清里町
豊浦町

東北

青森県
西目屋村

岩手県
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

宮城県
七ヶ宿町

秋田県
東成瀬村

山形県
小国町
飯豊町

福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

関東

栃木県
日光市

群馬県
上野村
南牧村
みなかみ町

東京都
檜原村
奥多摩町

中部

新潟県
長岡市
津南町
関川村

福井県
おおい町

山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

長野県
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曽町

岐阜県
高山市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
東白川村
御嵩町
白川村

静岡県
小山町

愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

近畿

三重県
津市
熊野市
大台町
大紀町

滋賀県
長浜市
米原市

京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

兵庫県
丹波市
多可町
神河町

奈良県
天川村
川上村

和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

中国

鳥取県
若桜町
日野町

島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

岡山県
真庭市
里庄町
鏡野町

広島県
庄原市
神石高原町

四国

徳島県
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

香川県
まんのう町

愛媛県
西予市
久万高原町

高知県
東洋町
奈半利町
田野町
安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梼原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

九州

佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市

大分県
大分市
佐伯市
臼杵市

宮崎県
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町

鹿児島県
日置市

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会
電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会

水の源 vol.40　企画・発行：全国水源の里連絡協議会　発行：平成30年3月　編集：水の源編集委員会